

平成 30 年 7 月 5 日現在

機関番号：18001

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K03016

研究課題名(和文) 沖縄県系移民の越境的ネットワークと意識・行動に関する地理学的研究

研究課題名(英文) Geographical study on transnational networks and consciousness and behavior of Okinawan immigrants

研究代表者

町田 宗博 (MACHIDA, Munehiro)

琉球大学・法文学部・教授

研究者番号：10145518

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：2015年7月には、米国アイダホ州での「第7回国際バスク文化フェスティバル」を現地調査した。さらに同年10月のアルゼンチン国マカチンでのバスクフェスティバルでアンケート調査を実施した。これを従来のウチナンチュ調査と比較検討した。この国際比較の結果として、沖縄県系移民の越境的ネットワークにおける、言語文化や社会空間の形成や行動、ウチナンチュアイデンティティなどの意識の特質の一端が明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：In July 2015, we conducted a field survey of the "7th International Basque Cultural Festival" in Idaho State, USA. In addition, we conducted a questionnaire survey at the Basque Festival in McAchin in Argentina in October of the same year. We compared this with the conventional Uchinanchu survey. As a result of this international comparison, it became clear that the nature of consciousness such as linguistic culture and social spatial formation and behavior, Uchinanchu identity etc in the transnational networks of Okinawan immigrants.

研究分野：人文地理学

キーワード：沖縄 ウチナンチュ大会 沖縄県系 移民 バスク 文化共有集団 県人会館 バスクの家

1. 研究開始当初の背景

琉球大学法文学部地理学教室は1978年に「南米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究」が文部省科学研究費補助金(海外学術調査)に採択されて以来、南米3回、北米1回、南洋2回と対象地域を変えながら、沖縄県出身移民の地理学的研究を行ってきた。これまで各国/地域で2,000人を越える沖縄県出身移民に詳細な個別調査を行い、主に移民の属性と移動プロセス、渡航後の現地での定住状況や調査時までの住居・職業移動経歴について明らかにしてきた。

研究代表者は1984年からの南米第2回調査に参加して以来、これらの科研費調査に関わり、主にブラジル・サンパウロ市内における沖縄県出身移民の分布と職業構成について報告してきた(町田, 1989)。また、最近の調査では、ブラジル日系社会においては、「文協」などに代表される日系コロンビアの社会基盤が弱体化する一方で、沖縄県人会は社会基盤がますます強化されていること、その基盤は沖縄県系移民の居住地分布、支部会館の存在、諸行事などによって大きく支えられていること、などを明らかにした(町田, 2013)。このように、北米、南米などでの現地移民調査により、沖縄県系移民は、ホスト社会において沖縄県人会をはじめ、市町村人会、字人会など空間スケールが異なる各種の同郷組織を組織化し、日系人、沖縄県系人としての文化、アイデンティティの保持を図ってきた。

このように、特異な文化を持つと自他ともに認める沖縄県系人は、国内のみならず海外においても独自のコミュニティおよび社会空間をホスト社会で形成してきたが、グローバル時代を迎えた今日、今やその凝集力で国境を越えた沖縄県系ネットワークを形成している。例えば、沖縄県の主導で1980年に始まり、5年毎に行われる「世界のウチナーンチュ大会」は、2011年の第5回大会では海外から5000人以上が参加し、ネットワークが視覚化された。1997年にはWUBが、2011年にはWYUAが発足して活発に活動を展開している。前者は沖縄県系の経営者たちの、後者は若者のネットワークである。こうした国境を越えた人の移動の活発化に伴う新たな越境的な社会空間の形成については、中国系やインド系などで見られる現代の社会現象でもある。例えば、インド系移民は、1989年に第1回インド系移民世界大会を開催した。インドのIT産業はインド系移民技術者が牽引していることも報告されている(古賀, 2000)。沖縄県系人の越境的なネットワークも、このようなグローバル時代の世界的な動きと軌を一にしているのである。しかし、各種存在する越境的ネットワークの構造およびネットワークが、移民地域に及ぼす影響を明らかにした研究は日本の地理学分野では見当たらない。

近代の歴史のなかで、沖縄県系移民はホス

ト社会との軋轢や被差別意識の中で鍛え上げられ、時にコンプレックスを伴いながら日系人として、沖縄県系人としてのアイデンティティを持ってきた。それが20世紀後半になると、世界各地に雄飛した「国際性」というイメージを取り込み、グローバルに開かれ、プライドも含めた新しいアイデンティティを意識するようになった。その一方で、世界各地に散在する沖縄県系人のアイデンティティや、県人会活動への参加行動、越境的なネットワークへの近接性は、移民が居住するホスト社会の歴史・文化・社会の状況により、地域的な差異が認められると予想される。出自を同じくする沖縄県系移民の意識、行動、ネットワークへの近接性をホスト社会ごとに比較することで、地域と世代を越えた共通性、および個別性が浮かび上がるものと思われる。すなわち、移民社会の普遍性と地域固有性の検討を行うことが研究の課題である。

2. 研究の目的

本研究は、次のことを明らかにすることを目的とした。

(1) 海外の沖縄県系コミュニティの形成・維持・継承における、ハワイ、ペルー、ブラジルの県人会組織の存立基盤の地域的特徴を明らかにする。

(2) 沖縄県系移民の越境的ネットワークが成立し、かつ継承されるためには、精神文化の共有と経済的交流が車の両輪のように有機的に連動することが極めて重要と思われる。これについて現地調査をふまえ、ネットワークの機能と構造および地域性を明らかにする。同時に、これらネットワークがハワイやペルー、ブラジルなど各国・地域の移民社会にどのような影響を与えているのかも明らかにする。

(3) 平成28年秋に開催される「第6回世界のウチナーンチュ大会」の開催年に合わせて、日本語、英語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語の5カ国語に対応した「世界の沖縄県系人の意識・行動調査(以下「沖縄県系人調査」)を行い、世界各地の沖縄県系人の意識やアイデンティティ、県人会活動への参加状況などに関して、地域間や世代間の共通性と差異性を明らかにする。

3. 研究の方法

本研究目的を達成するために、沖縄県系移民が多いハワイ、ブラジル、アルゼンチンを対象に、県人会など各種の民族組織に聴き取り調査を行い、沖縄県系の越境的なネットワークの構造や空間的特質について現地調査を実施し、聴き取りや文献資料収集を実施した。

さらに、沖縄県系人と同様に、言語などの文化を共有する集団(文化共有集団)としてスペインのバスク地方出身者(バスク人)をとりあげ、両者を比較検討する中で、沖縄県系移民の特質を明らかにしていく手法をと

った。この実現のために、沖縄県系移民とバスク人の両者について、アンケート調査結果の比較を試みた。

沖縄県系移民については、金城宏幸、町田宗博、宮内久光により2011年に世界のウチナンチュ意識調査が実施されており（「世界のウチナンチュ意識調査2011」）、2011年10月から2012年5月までの7ヶ月間に、ハワイ、ロサンゼルス、ブラジル、アルゼンチン、ペルー、フィリピン、日本国内など世界12地域に居住する沖縄県系出身者を対象に、1800部が回収されている。このアンケートの最大の特徴は、同一の設問内容となっているアンケート票を、日本語、英語、スペイン語、ポルトガル語、フランス語の5言語で作成していることである。これによって、アンケート対象者は自分が理解でき、回答が容易な言語のアンケート票を選択して回答することが可能となっている。本プロジェクトでは、このアンケート結果を沖縄県系移民のデータとして用いることとした。

バスク人に対するアンケート調査は、前記「世界のウチナンチュ意識調査2011」の質問項目を援用し、2015年7月に米国アイダホ州ボイジーで開催された「第7回国際バスク文化フェスティバル」において予備的調査を実施し、2015年10月30日～11月1日にアルゼンチン国ラ・パンパ州マカチンで開催されたバスク文化フェスティバルにおいて本調査を実施した。フェスティバル期間中に108部が回収され、後日郵送により11部を回収し、合計119部のアンケート回答が得られた。このうちから回答が不備なものを除き、有効回答者数を105部として、これをエクセルにより集計した。さらに、2017年11月にアルゼンチンのサンニコラス市で開催されたバスク文化フェスティバルでもアンケート調査を実施したが、この調査は今回の結果には反映されていない。

4. 研究成果

今回の沖縄県系移民とバスク人のアンケート調査の結果については、「移民研究」（2016年10月）第12号に「文化共有集団による越境的ネットワークの国際比較研究-ウチナンチュとバスク人をめぐって-」と題し、特集号として刊行した。

第二次世界大戦前以来送出されてきた海外の沖縄県系移民の存在を背景に、1990年には沖縄県において「世界のウチナンチュ大会」が開催され、2016年には第6回を数えるにいたった。このように、国内の一地方である沖縄県が主催する世界規模の大会として、日本でも希少な存在として知られるようになってきている。国境を越えた社会的空間を形成する沖縄県系移民コミュニティの象徴が、この「世界のウチナンチュ大会」でもある。

この沖縄県系移民コミュニティと同様な動きをみせるのが、スペインのバスク地方を

出自とするバスク人コミュニティである。彼らも5年ごとに「国際バスク文化フェスティバル」を開催しており、世界に散在するバスク人が、言語などの文化的紐帯で強く結びついている。

この沖縄県系移民コミュニティとバスク人コミュニティの二つの集団が持つさらなる共通点と相違点を分析することにより、沖縄県系移民コミュニティのより普遍的な態様が明らかになり、グローバル時代における人々の移動や繋がり、さらには国境を越えた社会空間の形成にあらたな視角を導入する可能性があること確信し、アンケート調査とフィールドワークを通じた参与観察による調査を実施した。その結果、次のことが明らかとなった。

バスク人、沖縄県系人ともに多くの海外移民を送出してきたことが知られており、移民の歴史を通して海外にコミュニティを形成し、「県人会」や「バスクの家」を設立し維持・継承してきた。伝統的な家督相続に与らない者は海外移民にその活路を求めたという背景も共通しており、そうした人々の海の彼方における苦難の労働と送金が、母村の経済にとって極めて重要な時期があったことも双方に共通している。海外においては、それぞれ他のスペイン人あるいは日本人の組織にも参加する一方で、その文化的な差異から、国単位のコミュニティとは趣を異にした組織を形成してきた。

バスクと沖縄には、近年まで世代を超えて一族が同居する伝統があり、一子（特に沖縄の場合は長男）相続制を通して家族・同族意識と祖先崇拜が保持されてきた。山バスクの典型的な農家の家屋はバスク語で「バシェリ baserri」、スペイン語で「カセリオ」と称され、そこに居住する人々や所有地の核であって屋号を持つ。沖縄では「門中」という家系の相続慣習が同族の輪の中心になっており、それが発展して同郷意識を強化する原点にもなっている。現代ではやや希薄になりつつあるが、どちらの地域においても近年まで人々は屋号によってその出自や所属が分かるようになっており、海外においてもそうした血縁・地縁ネットワークの延長線上にコミュニティが形成されていった側面が多く見られる。

バスクと沖縄それぞれが、国民国家体制に組み込まれている過程で、この二つの文化共有集団は国内における文化的マイノリティという立場と差別を余儀なくされ、近代国家内における社会文化的な体験が他の地域とは趣を異にした形で集団意識が形成された。

バスク人や沖縄県系人の連帯意識と世界観の共有は、海外のコミュニティ内で次世代に受け継がれるだけでなく、母村との連続性も保持されてきた。特に近年の情報通信技術や交通手段の発達と相まって、国境を越えた新たなネットワークの気運が高まってい

る。このことは、バスク・ディアスポラの首都と呼ばれる米国アイダホ州の州都ボイジャーで5年毎に行われる国際バスク文化フェスティバルやバスク自治州政府の主導により4年毎に開催される「世界バスク系コミュニティ会議」、沖縄県の主催により同じく5年毎に開催される「世界のウチナンチュ大会」や在外ウチナンチュ・コミュニティの主導で数年毎に企画される「世界のウチナンチュ会議」などに表象されている。こうしたイベント以外にも、バスク人の多い米国やアルゼンチン、ウチナンチュの多い米国やブラジルでは毎年のようにフェスティバルが開催されて大勢の参加者で盛り上がる。これらの盛り上がりは、独特の文化に強い愛着の表象でもある。

以上のように、沖縄県系移民やバスク人などの越境的ネットワークを形成する集団の意識や行動の紐帯として、言語や芸能などの文化が強い影響を与えており、これを核として同一の文化共有集団としてのアイデンティティが形成されていることが明らかとなった。

これらのほか、資料調査において、戦前から戦後にかけて、ブラジルの沖縄県系移民や日系社会において指導的役割を果たしてきた翁長助成の日記を発見することができた。これは、沖縄県系のみならず、第二次世界大戦後のブラジルの日系移民社会の一端を明らかにしていく貴重な資料である。

また、1996年10月に開催された第6回世界のウチナンチュ大会においては、関連シンポジウムへの参加のほか、NHKの番組作成協力、出演協力をした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計8件)

宮内久光、近代的な施設の立地からみた島嶼型植民地・南洋群島の地域形成、国際琉球沖縄論集、査読有、7、2018、15-38

宮内久光、近代期における奄美大島宇検村からの移民について、人間科学、査読無、36、2017、17-50

<http://hdl.handle.net/20.500.12000/36765>

宮内久光、稲綾香、フィリピンからクウェートへの女性看護師の国際労働移動、移民研究、査読有、13、2017、49-94

<http://hdl.handle.net/20.500.12000/37290>

町田宗博、第二次世界大戦前のペルーにおける日本人同業者組合の設立、人間科学、査読無、37、2017、133-153

金城宏幸、文化共有集団の越境的ネットワークに関する国際比較研究序説、移民研究、査読有、12、2016、81-98

<http://hdl.handle.net/20.500.12000/36890>

浜崎盛康、ウチナンチュとバスク人のアイデンティティ意識について、移民研究、査読

有、12、2016、99-114

<http://hdl.handle.net/20.500.12000/36891>
金城宏幸、浜崎盛康、町田宗博、宮内久光、酒井アルベルト清、バスク系アルゼンチン人のバスクに対する意識、移民研究、査読有、12、2016、115-144

<http://hdl.handle.net/20.500.12000/36892>
金城宏幸、町田宗博、宮内久光、「世界ウチナンチュ意識調査2011」の集計結果、移民研究、査読有、12、2016、149-224

<http://hdl.handle.net/20.500.12000/36894>

〔学会発表〕(計2件)

MACHIDA Munehiro、Let's centralize Uchinanchu ancestor data in a "Worldwide Uchinanchu Center" - a place to collect and utilize Uchinanchu ancestor/emigrant records -、The 21st WUB Network Conference、2017、Honolulu(USA)

MACHIDA Munehiro、A Place for the Uchinanchu、The Okinawan Genealogical Society of Hawaii、2016、沖縄県立博物館・美術館(沖縄県・那覇市)

〔図書〕(計4件)

宮内久光 他、大宜味村史 移民・出稼ぎ編、大宜味、2017、442(1-442)

宮内久光 他、宇検村誌 自然・通史篇、宇検村、2017、1059

町田宗博 他、豊見城市史第4巻 移民篇(本論)、豊見城市、2016、624(3-624)

町田宗博 他、豊見城市史第4巻 移民篇(証言・資料)、豊見城市、2016、761(3-761)

〔その他〕

NHK、「金曜クルーズ-沖縄魂ここにあり! 集まれ世界のウチナンチュ」(生放送・沖縄県、再放送(九州地区、国際放送)、出演、2016

沖縄タイムス、2018/6/26、ブラジル県系戦後記録県人会前身初代会長翁長さん日記発見

6. 研究組織

(1) 研究代表者

町田 宗博(MACHIDA, Munehiro)

琉球大学・法文学部・教授

研究者番号: 10145518

(2) 研究分担者

金城 宏幸(KINJO, Hiroyuki)

琉球大学・法文学部・名誉教授

研究者番号: 50274874

浜崎 盛康(HAMASAKI, Moriyasu)

琉球大学・法文学部・教授

研究者番号: 30208574

宮内 久光(MIYAUCHI, Hisamitsu)

琉球大学・法文学部・教授

研究者番号: 90284942